

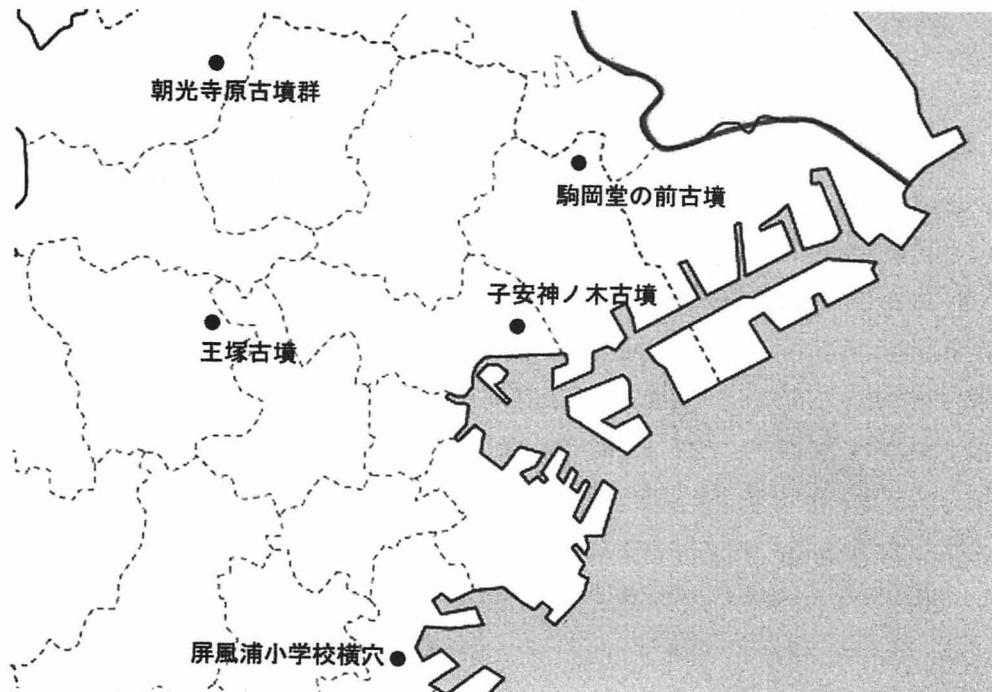
考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡（2）

－通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介－

古墳時代研究プロジェクトチーム

例　　言

- ・通称「赤星ノート」の神奈川県立埋蔵文化財センター保管分の古墳時代に関係する項目を抜粋し、報告・掲載していくものである。
- ・番号は埋蔵文化財センター年報14～18に記載されている番号に対応している。
- ・執筆分担は、01043・01131番：柏木 善治、01050番：植山 英史、01138番：近野 正幸、01144番：谷 正秋、01046番：須藤 智夫が行った。
- ・各記述は「1. 赤星ノートの内容」「2. 記載資料の整理」の2つに大きく分け、1. の細目は〔調査（踏査）年月〕〔資料保管場所〕〔記載内容概略〕とし、2. は〔（遺跡及び）遺物（遺構）概要〕〔掲載図書〕〔掲載図書概略〕〔小結〕などとし、資料に応じ該当部分を記載した。
- ・挿図や図版は基本的に作図者のタッチを重視し、赤星氏の図、もしくは実測者の図をそのまま掲載し、写真に関しても同様である。
- ・「赤星ノート」は遺構図では略測図に寸法の数字が記載されるものが多く、遺物図は基本的に原寸に近い図ではあるが、なかにはそれから外れるものも存在するため、縮尺は任意掲載のものが多い。



第1図 遺跡位置図

年報番号 01043・01131 朝光寺原古墳群1号墳 横浜市青葉区市ヶ尾町

1. 赤星ノートの内容

[調査（踏査）年月] 県史作成用に作られた集成カード「県史考古資料A 神奈川県内出土遺物所蔵者調査表が写真と同封されており、写真も神奈川県史資料編20考古資料に掲載されているため、その調査時と考えられる。

[資料保管場所] Pho: 1～4は三殿台考古館にて複写と記載。

[記載内容概略] 朝光寺原古墳群1号墳に関係するものは以下のとおり。

①「神奈川県立博物館だより」Mar.1984 Vol.16 No.4 (年報番号: 01043)

表紙写真に短甲と眉庇付冑が使用されている。特集は「県下新出土考古資料展について」。

②写真（年報番号: 01131） 文章等の記述は特にないが、各写真のシートにキャプションがつけられる。

シートA: 横浜市緑区市ヶ尾朝光寺原1号墳 左 全景 [Pho:1] 右 主体部 [Pho:2] (三殿台考古館にて複写)

シートB: 横浜市緑区市ヶ尾町 朝光寺原1号墳 粘土櫛内短甲と刀剣 [Pho:3] (三殿台考古館にて複写)

シートC: 緑区市ヶ尾 朝光寺原1号墳粘土櫛 [Pho:2と同じ] と鉄鎌 [長頸・Pho:4] (三殿台考古館にて複写)

シートD: 緑区市ヶ尾町 朝光寺原1号墳出土品 [鉄鎌短頸・Pho:5] [玉類・Pho:6] (三殿台考古館蔵)

※Pho:5・6のみ赤星氏が今回新たに撮影したものと思われる。

2. 記載資料の整理

[撮影遺構・遺物概要]

遺構 全景 [Pho:1] ・ 主体部 [Pho:2] (複写)

Pho:1は発掘調査略報で掲載された1号墳全景が複写される。周溝が写っておらず、調査前の遠景を撮影したものと考えられる。Pho:2は主体部の全容を撮影。

発掘調査略報（掲載報告書A）に記載される墳丘・周溝と主体部の内容は以下のとおり。「円墳とされ、幅12mでかなり深い周溝が1条廻る。直径37m、高さ2.5mだが（図面は全体図の墳丘等高線図と周溝の輪郭線が描かれるのみ）、高さは本来の数値ではないとされ、墳頂平坦部の様相から、上部に存在していた稻荷社を作る時に削平されたと推察されている。墳丘は全て盛土により、3段築成である。内部主体は割竹状の木棺を埋めた施設であり、墳丘平坦部の中央より発見。現地表面より深さ約70cmのローム盛土内に、黒土の落ち込みが認められ、長さは4.3m、幅約75cmで、主軸は東西方向である」とされる。

盛土による墳丘構築のことであるが、その状況が調査された例としては貴重である。3段築成ということであるが、略報には全体図にある等高線図のみしか提示されておらず、詳細は不明といわざるをえない。近隣における該期の古墳をみても、段築成であるならば特異な存在であろう。葺石はみられないが、多摩川左岸の古墳では存在するものがあり、鶴見川流域を中心としては地域的な特徴となろうか。埴輪の出土もみられないが、前期以降中期後半に至るまで隣接地域ではその存在が知られないものである。

墳丘規模は37mと該期の古墳では大型に属し、周溝幅12mという広さも例に乏しく、その存在からはより大きな古墳としての視覚的イメージも可能である。

主体部は木棺直葬のようであり、粘土櫛ではないものと報告される。掘方の記述もなく、棺内に遺物が集中することも伺える。中期中葉～後葉での円墳における副葬品の配置は、短甲1領および武器類が棺内から出土するものが通例であり、朝光寺原もそれに符合する。

遺物 粘土櫛内短甲と刀剣 [Pho:3] ・ 鉄鎌 [長頸・Pho:4] (複写)、鉄鎌 [短頸・Pho:5] ・ [玉類・Pho:6]

Pho:3は主体部東半の遺物出土状況。主体部は木棺直葬とされているため、「粘土櫛内」という記述は誤記であろうか。Pho:4は長頸鎌の銹着状況、Pho:5は短頸鎌の集合写真、Pho:6は滑石製の勾玉・臼玉と、碧玉製の管玉。

発掘調査略報（掲載報告書A）に記載される遺物の内容は以下のとおり。「木棺内の遺物は、東端に短甲1領があり、それに続く両側には剣6本、直刀3本、鉢1本の鉄製武器類がみられ、西隅には鉄鎌4束が置かれていた。遺骸は頭部を東に向けて埋葬されたものであり、付近には滑石製の臼玉151個、同じく勾玉1個が散らばっていた」とされる。他、個別遺物の記載はなし。

鉄製品は略報には図が掲載されておらず、赤星ノートにもそれに関する記載はない。写真から読み取れる状況や、その後公表された実測図（1993須山）などをふまえ、数量的にも副葬品の主体となる鉄製品を中心に所見を記す。

短 甲 主体部内東端より前胴を棺外に向け、三角板鉢留短甲が出土している。鉢が小さく、覆輪は革組、右前胴が開閉し、7段構成をとる。

連接数と鉢頭径 後胴豎上第3段での連接数は、実測図では全ての鉢が欠失からか図化されていないが、上下数が同数との視点に立てばその数は13個である。鉢は個体内でほぼ同じ大きさのものがみられ、縮尺不詳なため不明確ではあるが、径5mm以下となるいわゆる小型鉢が使用されている。製作の省力化という流れを想定するならば、鉢留数は減少していく方向での変化がみられ、最も鉢数の多い段階として捉えられる。併せて鉢頭径は小型鉢から大型鉢へという変化となるため、上記使用鉢の数量を鑑みても早い段階としての位置づけとなろう。

連接位置 7段構成の短甲であり、豎上第3段と長側第1段の幅は、後者が約1.5倍の幅を持ち、長側第2段と長側第3段の関係も同様となる。実測図から読み取れる鉢数が少ないため、ある程度の想定がはいるものの、前胴豎上第3段と豎上第1段（押付板）では、板の2箇所で連接が行われている。また、引合板と前胴長側第2～4段の関係をみると、帶金間に1箇所の連接箇所がみられる。この地板に1箇所鉢留めするという方法は、鉢留手法と共に採用されたものとみられ、製作における省力化という観点からみると、前記同様に早い段階として捉えられる。

開閉の有無と蝶番 右前胴開閉に分類できるが、胴一連のものもあるなかで、鉢留短甲の大多数はこの形態となる。規格化という側面を考慮したときに、右前胴開閉へと定式化していく流れに則した位置づけとなろう。蝶番は前後の胴に取り付けられており、それは革紐の両端を留めるもので、長方形の留金に2鉢が打たれる。三角板鉢留短甲では主流をなすものであり、前後の胴に取り付けるものから前胴のみ留金が付されるものへ変化が想定されている。

覆輪 三角板鉢留短甲で主流となる革組覆輪である。縁辺に沿って小孔を穿ち、革紐が組まれる。上縁は遺存状況も良くその状況が仔細に観察されるが、下縁は小孔が穿たれるのみで、革紐の遺存は認められない。

これら観察からは、連接数の多さや小型鉢の使用、帯板と地板幅の違いや蝶番金具の形状、革組覆輪などの諸状況を見ても、三角板鉢留短甲のなかで比較的古相を示すことが看取される。

眉庇付冑 主体部における遺物出土状況の写真に眉庇付冑は写っていない。どのような状況で出土したかの記述も無いため詳細は不明であるが、短甲内に収められた状態での出土らしく興味深い。小札鉢留眉庇付冑で、受鉢と管および鎧などが実測図ではみられない。地板となる小札上下の位置が一致するもので、眉庇は端部がおよそ10単位の波状となり、外縁には三角形、内縁では方形の透かしが施される。

剣・直刀 剣は略報では6振とされるものの5振りが、直刀も3振りとされるものの4振りが知られる。棺内左右両脇で、すべて切先を西に向かって副葬されていたようである。写真からは北壁際に3振りが、南に6振りがみられるが、剣と刀というものの違いにより配置分けが行われていたかは不明である。

剣は長・短で分けるならば長が3振り、短が2振りであり、総じて遺存は余り良くないものの、茎や剣身に木質が遺存しており、鞘に収めての副葬であることが解る。剣のうち短いものは槍との判別が困難であるが、主体部内での出土位置を鑑みても剣という位置づけで良いかと考えられる。剣で長いもののうち、不明瞭ながら2振りで鎬がみられ、1振りは断面凸レンズ状で薄く扁平な印象である。鎬のあるうちの1振りは拵えが痕跡として遺存し、関付近には鍔状の金具が付され、実測図からは柄での有機質?による糸巻き状の痕跡も看取されている。

直刀はすべて撫角片闊で、時代観に則り刀身は長大で身幅をえるものである。茎尻は隅抉尻と一字尻が2振りづつとなり、平造りでフクラ付の印象を受けるものが多い。隅抉尻のうち1振りは、銹化からかやや判然としないものの内反りの形態となる。すべての刀身には木質が遺存し、剣と同様、鞘に収めての副葬と考えられる。拵えは、鞘及び柄での木質の遺存も不良であり判然とせず、刀身には鍔などの銹着もみられない。

鉾 棺の側縁で剣・直刀と共に出土とされるが、その位置は写真からも判然としない。棺外からの出土では無いようであるが、限られた情報からは刃先の方向性なども定かではない。身部は鎬式、袋部は円筒袋式、袋端部は山形抉り式である。関の有無は、銹化からも判然としないものの明確な角度を持っての存在は無いものと考えられる。比較的小型の鉄鉾に属すと考えられ、身幅は狭くやや厚みを持つというその形態と、関の不明確さなども時代観を考える一助となろう。それは、袋端部が山形抉り式となる形態の鉾が盛行する、Ⅱ期（1998高田）を中心とした時期が該当するであろう。

鉄 鏃 短頸鎌と長頸鎌からなり、棺内では西寄りに分布の中心を持ち銹着しているものが多い。銹化著しく、形態等判然としないものが多い。長頸鎌の写真は、木棺西側で出土したとされる4束のうちの一つと考えられるが、位置関係や数量などは詳細不明である。

短頸鎌のうち三角形状を呈するものは、舌状の短い茎を具え、鎌身部中央には挟み止めた木質の遺存がそれぞれみられる。長三角形状のものが3点で、鋒よりフクラを有して内湾した後、そのまま逆刺端に至ったものである。うち1点は鎌身のほぼ中央に穿孔がみられる。三角形状のものは1点で、鋒よりフクラを有して逆刺端に至り、二重逆刺となる。これは鎌身中央以外にも有機質の遺存がみられ、有機質による胡籠などの容器、もしくは棺の木質が付着していることも想像される。柳葉形（鳥舌）は長頸鎌と共に銹着しており、数量等不詳ながら身幅の狭いものとやや広くなる両者が存在するようである。他、鋒よりフクラを有して内湾し、ほぼ直線状に垂下し逆刺に至る、いわゆる腸抉柳葉鎌もみられる。

長頸鎌では鎌身部形態が長三角形や片刃を中心として見受けられ、数量も比較的多い。関など細部の形状は、銹化により肉眼観察からは不明瞭である。

鎌は長頸鎌を主体とした構成で、柳葉（鳥舌）鎌は客体的な位置づけとした、第5様式期（TK73～208）が該当しよう（1988杉山）。類例としての提示は大阪・野中古墳などがあげられている。

[掲載図書] A：岡本勇他1968『朝光寺原A地区遺跡第1次発掘調査略報』

B：神奈川県県民部県史編集室1979『神奈川県史』資料編20 考古資料

C：緑区史編集委員会1986『緑区史』資料編 第二巻

[掲載図書概略] A：巻頭1頁下段が[Pho:1]の原本、巻頭2頁が[Pho:2]の原本。Pho:2は「稻荷前1号墳主体部全景」と誤植。B：図版726が[Pho:1]、図版727が[Pho:2]、図版728が[Pho:5・6]。Pho:5・6は県史にのみ掲載されているので、このために撮影したものと考えられる。しかし、Pho:6の玉類では、管玉が県史では2本掲載されている。C：図113が[Pho:1]と、図114が[Pho:2]と同じ。

[小結]

朝光寺原1号墳は、その形態や副葬品などをみても隣接地域を圧倒し、県内でも希有な存在として注目される。しかし、概要のみの報告であることからもその検討は十分にされてきたとはいえず、年代的な側面も同様であった。

副葬品となる遺物では、主に採りあげた鉄製品が全て棺内からの出土であり、武器・武具を主体とする組成となる。その検討からは、およそ中期中葉（5世紀中葉）という年代観があげられよう。県内で甲冑を出土している古墳は朝光寺原1号墳のみであり、近隣でも多摩川下流域左岸の野毛大塚古墳や御岳山古墳など、その出土は限られたものとなっている。短甲は遺存状態も良く、三角板銚留短甲のなかでも古相の印象を受ける優品である。また、小札銚留眉庇付冑とのセットとして出土した例は関東では未だみられていない。いわゆる首長墳となる前方後円墳に甲・冑が副葬される例はあるものの、円墳でその両者が出土するという特異性も評価すべきである。

墳形は3段築成の円墳ということであるが、近隣では類似例があげられない。周溝が12m幅を測ることからも、大きさの特異性は看取されるが、実測図の公開されていない現状では、段築成の存在における評価が成し得ない。朝光寺原の以西に位置する相模では、墳丘規模で海老名市上浜田5号墳や厚木市稻荷山1号墳などが、比較的規模の似通う円墳と考えられるが、総体的な様相では朝光寺原1号墳が卓越するものである。以東に転じては、御岳山古墳では葺石と埴輪を伴うとされるが、朝光寺原1号墳ではそれらがみられないものとなり様相を違える。

朝光寺原古墳群は3基よりなるとされ、およそ5世紀中葉～6世紀初頭までの年代観のなかで推移していく群である。近隣に所在する稻荷前古墳群は、前期～後期まで継続して営まれる群であるが、朝光寺原はそれらとは場所を違えて突如として出現する。そのあり方は在地勢力の推移のみでは把握しきれず、同時期にかような形成をみる古墳群の存在が知られることからも、広く列島的な時代的展開として特徴づけられるであろう。

撮影遺構・遺物概要の引用・参考文献

- 1988 杉山秀宏「古墳時代の鉄鎌について」『権原考古学研究所論集』第八
- 1991 滝沢 誠「銚留短甲の編年」『考古学雑誌』第76卷第3号
- 1993 須山幸雄「1 朝光寺原古墳群1号墳」『甲冑出土古墳にみる武器・武具の変遷』第IV分冊
第33回埋蔵文化財研究集会
- 1998 高田貴太「古墳副葬鉄鎌の性格」『考古学研究』第45卷第1号
- 2004 柏木善治「神奈川県内における古墳出土鉄製品の形態の検討」『研究紀要』9 (財)かながわ考古学財団

(柏木)

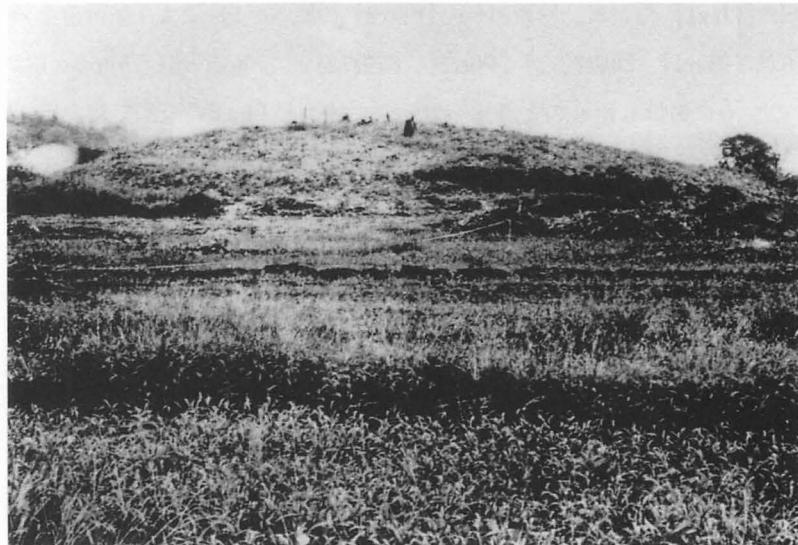
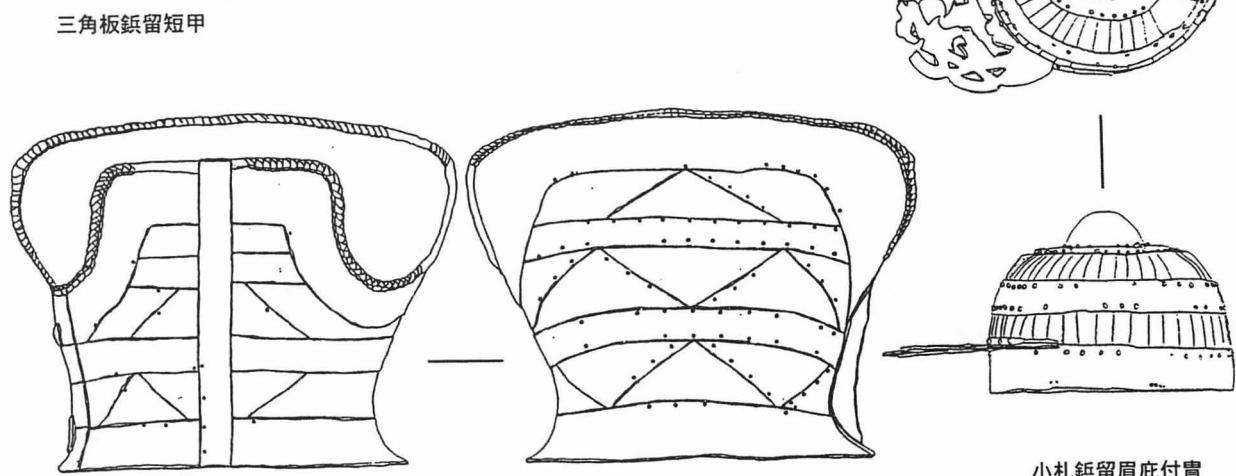


写真1 朝光寺原1号墳 全景 [Pho:1]



写真2 主体部出土玉類 [玉類・Pho:6] (三殿台考古館蔵)



第2図 朝光寺原1号墳主体部出土遺物 (縮尺不詳)

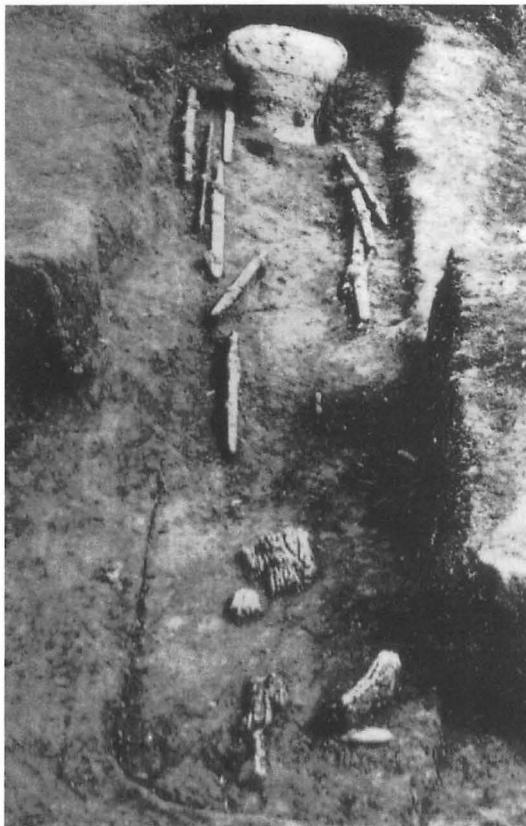


写真3 主体部全景 [Pho:2]
(三殿台考古館にて複写)

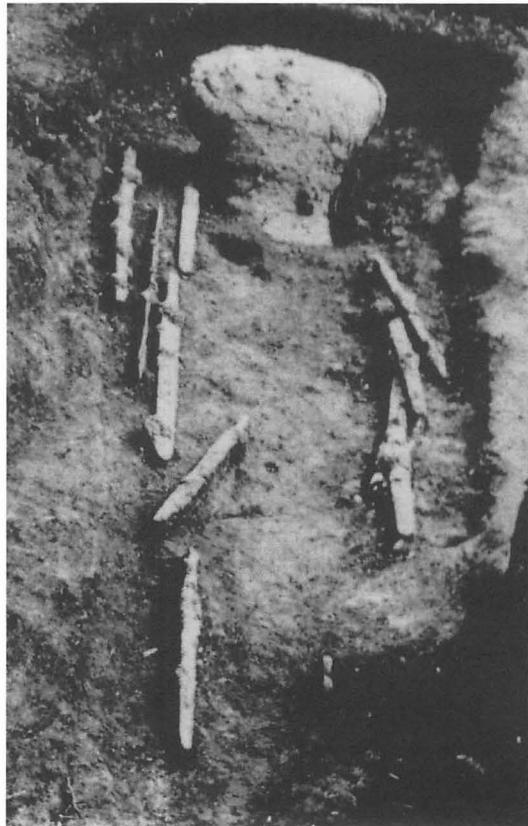


写真4 主体部出土短甲・刀剣 [Pho:3]
(三殿台考古館にて複写)

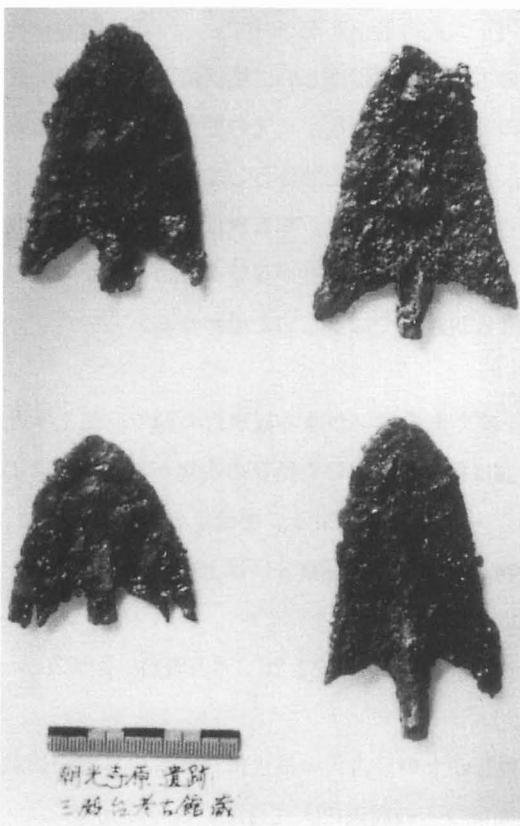


写真5 主体部出土鉄鏃 その1 [短頸・Pho:5]

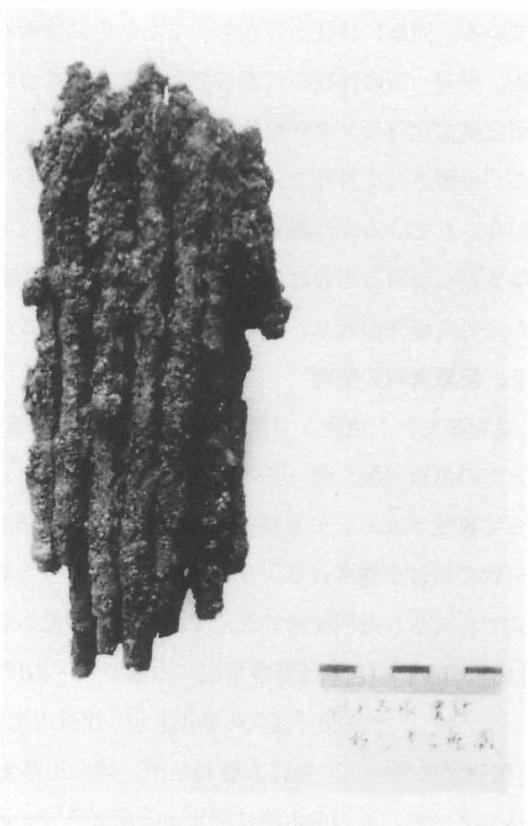


写真6 主体部出土鉄鏃 その2 [長頸・Pho:4]
(三殿台考古館にて複写)

年報番号横浜01050 駒岡堂の前古墳／（大倉山公園内古墳） 横浜市鶴見区駒岡町4丁目／（港北区太尾）

1. 赤星ノートの内容

[調査（踏査）年月] 不明。県史に記述があるため、県史用に集成した資料の可能性あり。

[資料保管場所] 熊野神社

[記載内容概略] 墓輪スケッチ図2枚①② 台紙にモノクロ写真各2枚を貼ったもの2枚（メモあり）

形象埴輪2体のスケッチ及び写真で、それぞれ個別に描かれている。スケッチは赤星直忠氏が行ったと思われるもので、①は鞍形埴輪の一部である。横に「埴輪ゆき片 横浜市港北区太尾町 大倉山公園内古墳出土 石川武靖弘」のメモがある。②は形象埴輪の一部と思われるが、何の部位かは不明である。メモによると差し込み式で作られており、下方は下部が拡がる円柱の上部に二条の突帯が巡るものでその上に縦位の張り出しを持つものが乗る。赤星氏のメモによると上方を下方に「作るときに内にさしこんでいる」模様で、差し込んだ形状の断面形の模式図が描かれている。写真8は円筒下方から写したものである。

本資料については、①が「神奈川県史」で大倉山公園内古墳出土埴輪として紹介されている。また、①②が「古代のよこはま」では駒岡堂の前古墳出土埴輪として紹介されている。このように異なる古墳の資料として紹介されている理由について触れておきたい。まず、大倉山公園内古墳については、その詳細を報告した資料はなく、どのようなものであったか判然としない。大倉山公園は、横浜市港北区太尾に位置し大倉精神文化研究所が所在することで著名である。台地上の一帯は「大倉山精神文化研究所内遺跡」として周知化されており、古くから石野瑛氏や古谷清氏などによって紹介され、専ら弥生時代の遺跡として注目されているが、古墳の存在については不明である。一方、堂の前古墳は全長25mの前方後円墳で、埴輪が多数出土している。同地には社が存在し、また県史には所有者として石川正人氏の名前が記されている。氏は熊野神社他、周辺一帯の神社の代表者である。本件について当該地域の古墳の状況に詳しい、横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターの鈴木重信氏にお伺いしたところ、堂の前の埴輪は先代が地元の稻葉氏が採取したものが寄贈されて神社で保管しており、本埴輪も「古代の横浜」では寄贈された埴輪として堂の前古墳出土で紹介されているが、編集時には今回の赤星ノートの存在は知られていなかった。本資料は県史編纂作業で収集された資料と思われるが、大倉山古墳出土の場合はどのような経緯で熊野神社が保管することになったのかという疑問が残り、どちらの古墳出土であるか判断することは現段階では難しいと思われる。

2. 記載資料の整理

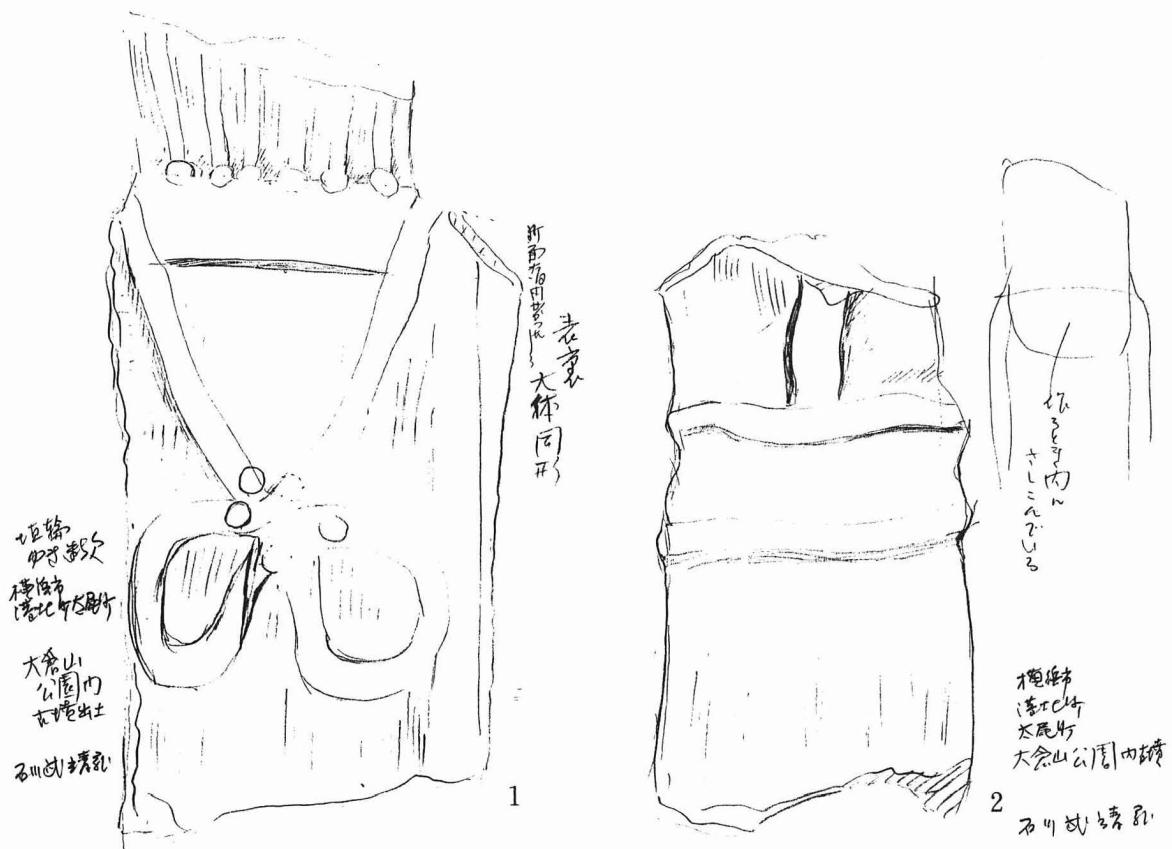
[遺物概要] 遺物1（第3図・写真7）は形象埴輪の鞍の一部である。いわゆる奴馬形の鞍で筒部上半と上方の飾板（矢）の一部が残存し、翼部は欠損している。筒部は覆輪から提げた結びの表現が粘土の紐によって表現される。矢も飾板に紐の貼付をして表現されており、6本が確認出来る。覆輪と矢の接点部分は、玉状の貼付が施される。6世紀前～中頃のもと思われる。遺物2（第3図・写真8）は上記の通り差し込み式で作成された円筒形の部位で形象埴輪と思われるが、種別は不明である。

[掲載図書] 1979「遺跡解説 古墳時代・古代405 大倉山古墳」『神奈川県史』20 考古資料 図版705

1986『古代の横浜』「16.鶴見川流域の埴輪」

[掲載図書概略] 先にも触れたが、神奈川県史は遺物の記載しかない。古代の横浜には両者の写真が掲載されている。堂の前古墳に関する文献として、池谷建治「駒岡及びその周辺の上代遺跡」（1969）がある。

(植山)



第3図 墓輪スケッチ

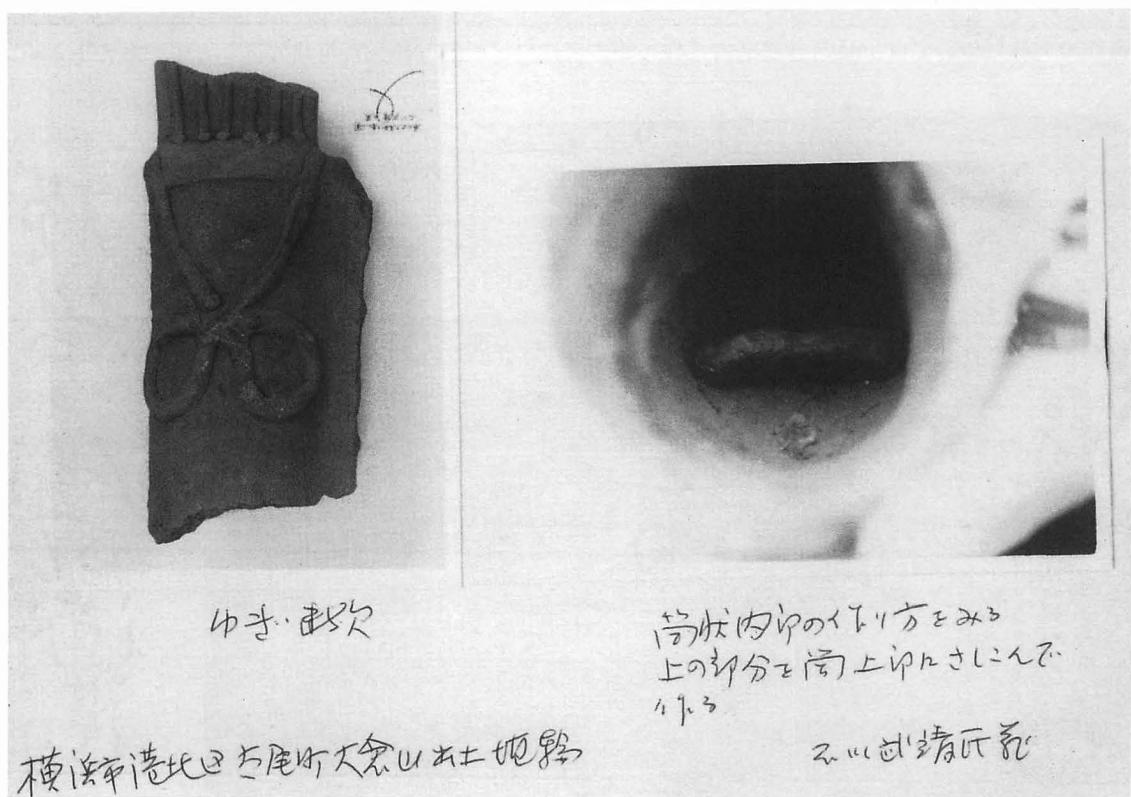


写真7 鞍形埴輪

写真8 不明埴輪円筒下方から

年報番号 01138 屏風浦小学校横穴 横浜市磯子区森三丁目648付近

1. 赤星ノートの内容

[調査（踏査）年月]

昭和36（1961）年9月14日付けで横浜市立屏風浦小学校鈴木次郎校長より赤星氏へ、同校裏山からの出土品について連絡があり、同年9月18日に現地へ調査に赴いている。

[資料保管場所]

小学校裏山からの出土品の内、勾玉2点・耳環1点が現在「校宝」として同校に収蔵されている。

[記載内容概略]

①「横浜市屏風浦小学校出土品について」（報文の下書き：B5判2枚）

昭和36年10月19日付けで赤星直忠（当時、県文化財専門委員）より県教育庁社会教育課長宛に報告した文書の下書きであり、同校裏山からの出土品に係る経緯・調査結果（内容）・措置等について記されている。

②屏風浦小学校鈴木校長より赤星直忠への書簡（官製はがき）

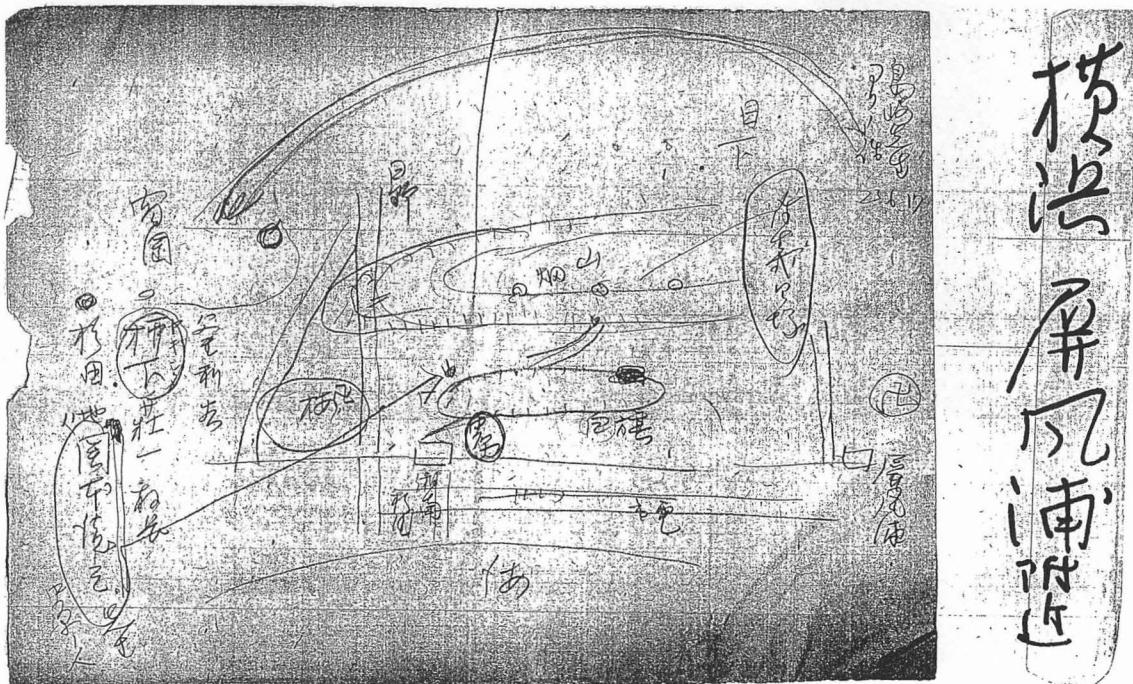
調査の発端となった書簡であり、同校裏山からの出土品について赤星氏に指導を仰ぎたい旨が記されている（昭和36年9月14日付）。

③同校裏山（白旗山）周辺の見取り図（第4図）

同図を入れた封筒には「横浜 屏風浦附近」と走り書きがあり、内容的にはおそらく9月18日の現地調査時に赤星氏が作成したものと思われる。

④「森町横穴群」（『神奈川県史』資料としてのメモ：B5判2枚）

昭和53（1978）年1月23日付けで赤星氏が『県史』の資料として作成したメモ。内容については、昭和36年9月18日の調査における鈴木校長からの聞書をもとに纏めたものと思われ、①の報文にほぼ準ずる。また、本遺跡の名称については、長昌寺前横穴墓群の報告書に^{*1} “屏風ヶ浦・森町横穴群”との記載があるため、



第4図 「横浜 屏風浦附近」見取り図（図の中央「白旗」の文字上の黒丸が遺跡の位置）

これを用いるとしている（但し、『県史』資料編20では名称を「屏風浦小学校内横穴」として記載）。

※1) 横浜市埋蔵文化財調査委員会 1971「横浜市金沢区富岡町長昌寺前横穴群発掘調査報告」『昭和46年度 横浜市埋蔵文化財調査報告書（III）』

2. 記載資料の整理

[遺跡・遺物の概要]

赤星氏の報文（上記【記載内容概略】の①・④）によれば、屏風浦小学校が杉田小学校分校時代の「昭和30年8月頃」（A）及び屏風浦小学校に独立後の時代の「昭和34年10月頃」（B）に、それぞれ行われた敷地拡張工事において遺構・遺物が発見されている。

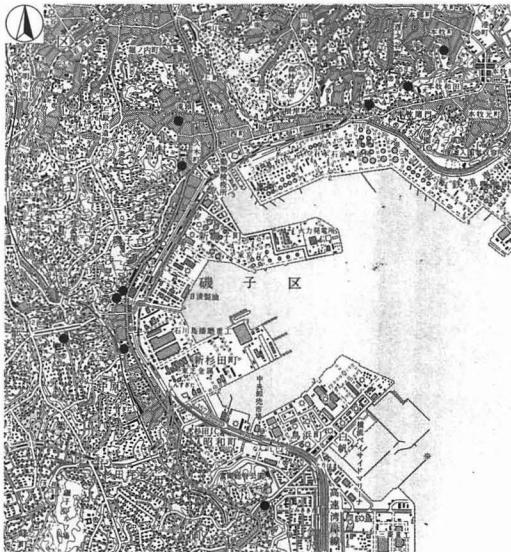
Aの時には、校舎南側の白旗山を切開中に山腹から、めのう製勾玉2、銀環1、直刀などが出土し、「穴は井戸のように深くなっていた」という証言に基づき、これを赤星氏は埋没した横穴墓（古墳時代）の天井が工事により崩壊したものと判断している。出土品の内、勾玉と耳環のみが保存され、直刀は鍔がひどく土とともに埋めてしまったようである。

Bの時には、やはり白旗山を切開中に山腹のやや高所から、常滑焼壺2、凝灰岩製五輪塔空風輪1、秩父片岩板碑半欠（刻字なし）1が発見されており、出土状況的にはAと同様であったという証言に基づき、赤星氏はやぐら（中世）が存在したと理解している。

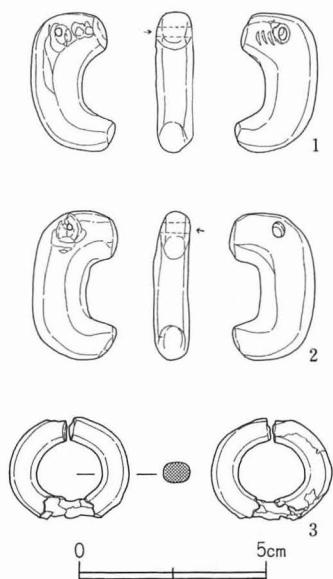
遺跡の所在する屏風浦小学校の地は、旧地番で言うところの磯子区森町字白旗646番地にあたる。地形的には、東京湾（根岸湾）に面した南北方向の独立丘陵（通称白旗山、離山、蛇山）上に位置しており、この丘陵を開削し、周辺部を埋め立てることで学校用地を造成している。現状でも、校舎の建つ場所はグランドよりも一段高くなっている（標高約10m）、東京湾側の平地部との比高差は約7mと大きい。昭和6（1931）年に横浜土地協会より刊行された『横浜市土地賣典 磯子區之部』の地目から白旗の独立丘陵の範囲を復元したものが第5図右であり、この範囲と遺跡分布地図（第5図左）の該当部分を照合すると、海岸とは反対の西側斜面部において開口していたことになり、位置的には上記【記載内容概略】③の見取り図とも合致する。『神奈川県埋蔵文化財包蔵地台帳』によれば、本横穴墓は「磯子区No.30遺跡（市No.：磯子区No.39遺跡）屏風浦小学校横穴」として登載されており、台帳の記載内容からは『県史』資料編20の記述（下記【掲載図書】A）に基づき作成されたことがわかる。『神奈川県遺跡分布地図』に登載されている範囲では、周辺における同様の遺跡（横穴墓）については、北へ約800mの位置に森浅間神社を乗せる丘陵が存在し、その裾部で2地点（磯子区No.55遺跡、同No.56遺跡）の所在が、西へ約800m離れた大岡川流域に近い位置にも1地点（磯子区No.28）の所在が確認されている。一方、根岸湾沿いの横穴墓の分布を見ると、約3kmほど北上する堀割川の西岸周辺には磯子区No.8遺跡、同No.57遺跡の存在が認められる。磯子区No.28遺跡を除くこれらの横穴墓は、いずれ



第5図 白幡山の範囲と遺跡の位置
(左『横浜市文化財地図』、右『横浜市土地賣典 磯子區之部』)



第6図 根岸湾沿いの横穴墓の分布 (S=1/100,000)

第7図 横浜市屏風浦小学校
横穴出土品（同校収蔵）

も湾の後背丘陵斜面に形成されたものであり（このうち、本遺跡と磯子区No.8遺跡については独立丘陵の斜面に営まれている）、当該地域における未発見の横穴墓の存在をも含め、おそらく地點的には少ないながらも中区の本牧から金沢区の富岡付近までの海岸沿いに点在していたものと考えられる（第6図）。

出土品については、昭和36年9月18日の調査時に、小学校で保存したいとの希望があったため、赤星氏から手続きに関して県社会教育課文化財係に問い合わせるよう伝えたとしている（上記※1の報告書にも「出土品は地元関係者により合法的に持ち去られたと伝えられる」との記載がある）。しかしながら、『県史』資料編20においてはAの出土品についての記載はあるもののBのそれにつ

いての記載はなく※2、平成16年7月15日に同校で現物を実見した際にも、勾玉2、耳環1の存在しか確認できなかった。

なお、第7図に示したものは、所在を確認した出土品を資料化するため実測したものである。1・2は勾玉である。材質は瑪瑙、形状は頭と尾の角張ったコ字形をなす。いずれも片側方向からの穿孔であり、刻文等の存在は認められない。両者は、サイズ的にもほぼ類似しており、所謂該期に盛行するタイプのものである。3は金銅製の中実耳環である。形状は僅かに潰れた円形をなし、環の断面は橢円を呈する。欠損部では緑青の噴き出しが顕著であり、銅芯に金を被せた状態が観察できる。これを赤星氏が「銀環」としているのは、現状でも確認できるごとく、欠損により金が剥がれた部分の青銅が銀色を発しているためではないかと想定される（下記【掲載図書】Bにおいて、おそらくこの耳環と思われるものについて石野瑛氏は「金環（青銅箔金）」と記している）。

※2）『県史』資料編20では、収録されている時代が“古代”までとなっているため、Bの中世に該当する部分が取扱われてはいた可能性もある。

[掲載図書]

A：赤星直忠 1979「遺跡解説 古墳時代・古代 396 屏風浦小学校内横穴」『神奈川県史』資料編20 考古資料 神奈川県

B：石野 瑛 1958「横浜市磯子区森町（離山）蛇山横穴群」『日本考古学年報』7（昭和29年度）日本考古学学会

なお、『日本横穴地名表』※3の神奈川県の項には、本横穴墓について「100 蛇山 十数基 横浜市磯子区森町離山 直刀・耳環・勾玉」とあり、文献として上記Bの報文が挙げられている。

※3）斎藤忠・杉山博久編 1983『古墳文化基礎資料 日本横穴地名表』吉川弘文館

[掲載図書概略]

A：本遺跡の所在地・種別・概要・出土品等についての記載があり、本文のみで図版等はなし。内容的には、

上記〔記載内容概略〕の①・④に準ずる。

B：本遺跡についての石野瑛氏（当時、県文化財専門委員）による踏査結果の報文である。内容的には、赤星氏の報文と大凡合致するものの、細かい部分で整合しない箇所が存在するため、以下原文のまま掲載し、若干の検討を行う。

所在地：横浜市（相模国）磯子区森町離山（蛇山）杉田小学校分校舎前　　調査期日：1月22日　　調査者：石野 瑛

調査概要：恰もこの日、県文化財専門委員会は、逗子市山ノ根297^{アツブ}本多庄作氏邸後山の横穴群10穴を発掘調査することとなって同地に出向したが、（中略）わたくしはそのころ激しいいきおいで破壊中の磯子区森町の海岸にほど近い離山（蛇山）に至った。（中略）海辺の地、そばたつ離山の山容は時々刻々崩されて杉田小学校分校に伴う運動場の埋立土として運ばれ、（中略）推定十数の横穴群も崩壊し、1、2穴の玄室の奥部をのこすのみとなった。そこから直刀（破碎）・金環（青銅箔金）1・勾玉1、瑪瑙4顆が出土した（出土物は同地小学校に保存、かくてこの小報文に既往の所在をしめすのみとなった）。

まず、調査期日についてであるが、石野氏は1月22日としており、赤星氏が県教育委員会主催で逗子市山野根の本田庄作氏裏山横穴群の調査を行ったのが昭和29（1954）年1月17日～27日であるため、正確には昭和29年1月22日となる。しかしながら、赤星氏の報文（上記〔記載内容概略〕①・④及び〔掲載図書〕A）によれば、横穴墓に関連する遺物が出土したのは昭和30（1955）年8月頃としており、両者間で齟齬が生じている。これについては、鈴木氏が屏風浦小学校の第2代校長として赴任したのが昭和35（1960）年のことであり、校長自身も事の顛末は伝聞によるものと想定されることから、調査期日（遺物出土の時期）としては石野氏の記す昭和29年の1月とするのが正しいと判断される。

次に、出土品の内容については、赤星氏の報文及び小学校に現存している遺物と照合すると、玉類の数量が合致せず、これについては上記〔掲載図書〕Bの報文内容より石野氏は現地で遺物を実見していたものと考えられることより、出土した後に小学校に収蔵されなかった遺物が存在していたか、もしくは石野氏の誤記載のいずれかの可能性が指摘される。

また、赤星氏の報文では穴（横穴墓）の存在を指摘するに止まっていたが、石野氏の報文では本遺跡が推定十数基からなる横穴墓群であったことや、現地で玄室の奥部が遺存していることが確認されている。

さらに、かかる不整合部分の存在以外にも石野氏の報文の存在により生ずる疑問としては、赤星氏が鈴木校長から連絡を受けるまで、この遺跡・遺物の存在を知らなかつたということである。これは、赤星氏の上記〔記載内容概略〕①にある「校長より校舎裏山より出土品があった旨連絡に接したので切崩工事中の出土品と思ったので現場をそのままにするよう依頼しておき昨18日調査におもむいたところ、以前校地拡張中の出土品であると知れた」との記載からも明らかである。但し、石野氏の報文が掲載された『日本考古学年報』が刊行されたのは昭和33（1958）年3月のことであり、鈴木校長から赤星氏へ連絡のあった昭和36年9月までは約3年半の月日が経過していることから、本遺跡の存在が赤星氏の記憶から遠ざかっていた可能性も強ち否定できないところではある。

昭和36年当時と言えば、赤星氏も石野氏も県文化財専門委員として在任中のことであり、本遺跡のことが話題に上れば、情報としても十分に共有できたはずである。そして、筆まめな石野氏自身の本遺跡についての記述も、この『年報』以外に認めることができず、同氏が工事中の現地を踏査するに至った経緯等も含めて明らかにし得ない点が多いことは残念である。

（近野）

年報番号01144 子安神ノ木古墳（富士見塚古墳） 横浜市神奈川区神之木台22-14付近

1. 赤星ノートの内容

[調査（踏査）年月] 大正6（1917）年

[資料保管場所] 東京国立博物館 藏

[記載内容概略] 神奈川区子安神ノ木古墳（遺物）とあるが、残っているのは3枚の遺物写真のみ（写真9～10）。それぞれの写真の裏側には次のとおり器種と計測値がメモ書きされている。壺、高29.0cm、胴24.0cm。盤、口径14.0cm、高6.7cm。高杯（と判別できるが、この写真だけは器種が書かれていません）、口径16.2cm、高13.5cm、脚径11.0cm。

2. 記載資料の整理

[遺跡及び遺物概要] 現在は神奈川県遺跡台帳に富士見塚古墳として登録されている。台地上に築造された円墳だが、すでに消滅しており、詳細は不明。完形に近い壺（もしくは甕）・壺（塊）・高杯の3点はいずれも古墳時代中期の土師器で、内外面の一部に赤彩痕がある。同時に出土した土師器残片は古墳時代前期～奈良・平安時代のもの。その他、弥生土器（後期）・縄文土器（中期）の破片等が若干出土している。

[掲載図書] 1979「遺跡解説 古墳時代・古代 299 富士見塚古墳」『神奈川県史』資料編20 考古資料
東京国立博物館 1986『東京国立博物館図書目録』古墳遺物篇（関東Ⅲ）

[掲載報告書概略] 『神奈川県史』に遺跡解説と遺物写真1点、古墳については円墳とのみ記載されている。『東京国立博物館図書目録』には遺物写真7点とその解説が記載されている。
(谷)



写真9 土師器 甕



写真10 土師器 壺



写真11 土師器 高杯

年報番号01046 王塚古墳 横浜市保土ヶ谷区白根625～627（現在は旭区白根7-1-1）

1. 赤星ノートの内容

[調査年月]

古墳は王塚古墳とよばれて知られていたようであるが、石室は1964年8月16日に発見され、同年9月から10月に調査がおこなわれた。赤星氏がこの事実を知ったのは、翌年2月5日に開催された神奈川県文化財専門委員・史跡部会の席上と思われる。

[資料保管場所]

横浜第一商業高等学校西谷分校用地内での発掘調査後、出土品は本校（鶴見区東寺尾町703）で保管されたようである。その後、学校は西谷分校用地内に移転し、名称も横浜商科大学高等学校（旭区白根7-1-1）と改められたが、出土品も同校の校史資料室に保存されている。このうち金属製品については、1989年から1990年にかけて帝京大学山梨文化財研究所において保存処理がなされた。また、石室の石材と思われる泥岩の切石破片も数点保管されている。

[資料の概略]

I、文化財専門委員史跡部会開催についての通知 1965年2月5日、建設会館で開催された。

II、文化財専門委員史跡部会に参加した際の赤星氏メモ 古墳が発見された場所、日付、調査者、出土品を記している。また、この古墳の調査に関する留意点についても、いくつか記している。

III、生方晃俊（1965）『横浜市保土ヶ谷区白根町626番地 横浜第一商業高等学校西谷分校用地内 発掘調査報告書』 この報告書は全部で17頁からなり、埋蔵文化財発見届控、埋蔵文化財保管証控、図面、写真で構成されている。このなかに、赤星氏の書き込みが残されている。

I、II、IIIは「横浜市保土ヶ谷区白根町横穴式石室墳」と題するレターファイルに綴じられている。

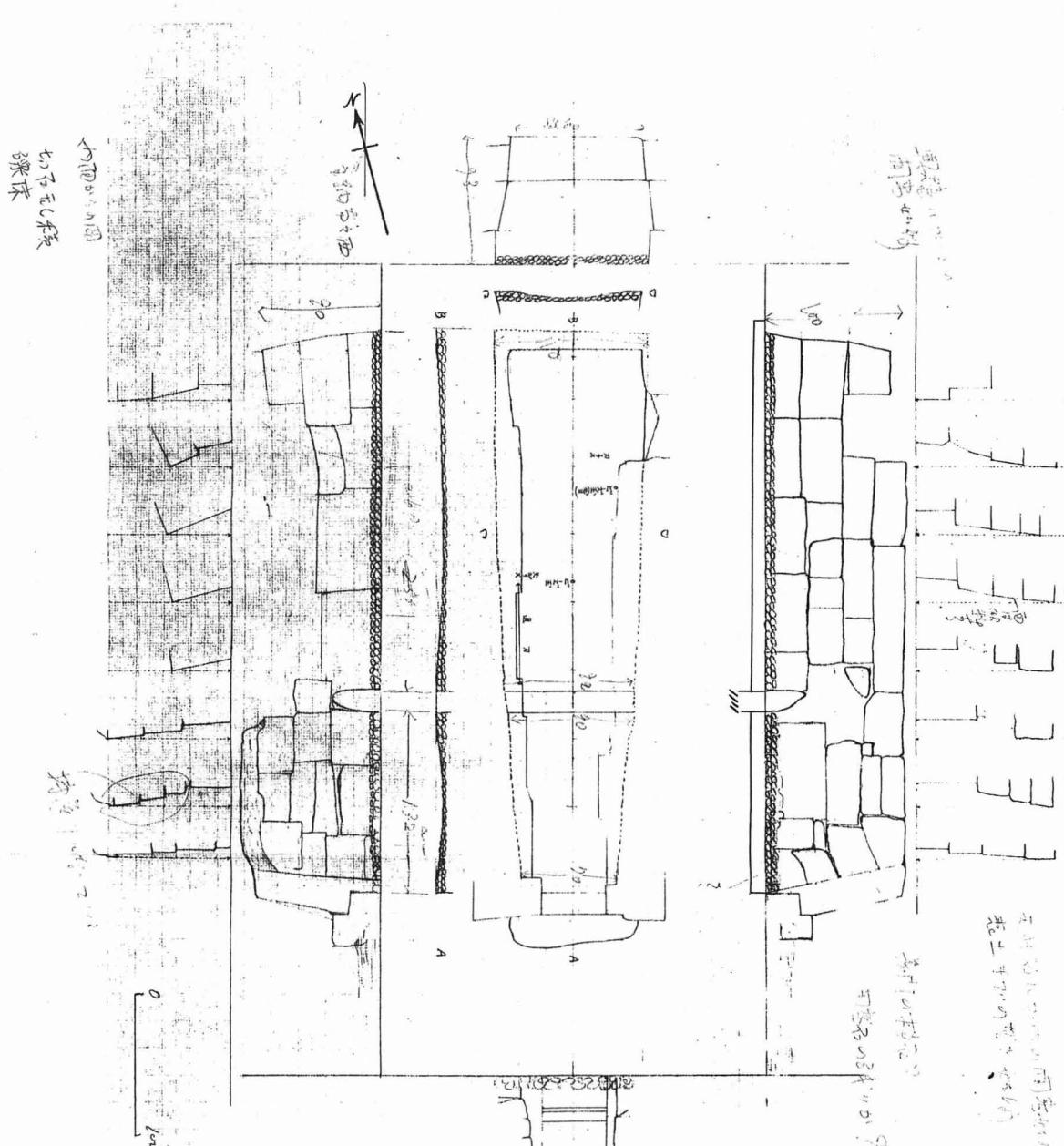
2. 記載資料の整理

[遺構・遺物概要]

古墳の位置環境 墳丘はすべて消滅しているが、現在の横浜商科大学高等学校の体育館付近にあったと推定される。この場所は標高80m程の台地上であり、この地域の最高地点と認識されている。古墳の全景写真（写真12）や現況から、横浜中部地域一帯を一望の下にできる場所であったと思われる。現在は宅地化が進んで展望は限られているが、それでも帷子川の河口付近と東京湾方面を視認できる。古墳のあった台地の南側には中堀川が南東に流れ、東流する帷子川に合流する。東側では新井川が南流する。この中堀川・帷子川・新井川は標高40m程度の位置に平地を形成して、付近には集落も存在した可能性が指摘できるが、このあたりから古墳のあった位置はかなりの高所として意識されていたとみられる。

墳丘 調査者は円形の封土があったことを想定していたようであるが、調査当時には消滅していて詳細は不明である。

石室 天井石と側壁の一部がブルドーザーやパワーショベルによって破壊された状態で発見され、調査されることになったという。第8図や写真13～17などから、泥岩の切石積横穴式石室であることがわかり、玄室部と羨道部は幅14mmの框石で分けられる（写真13、14）。側壁は奥壁から羨門まで直線状になっているが、框石付近でごくわずかに前壁の意識が見られるかもしれない。主軸方向はN-15°-Eを示し、羨門は南南西に向かって開口する。第8図によると、石室の全長は422cmにおよぶ。玄室長は260cmで、幅は玄門部で90cm・奥壁部で110cmをはかる。羨道長は132cmで、羨門部の幅は70cmとなっている。高さは天井石や側



第8図 報告書掲載の石室実測図 (S=1/60)

壁の一部が破壊されていたため不明であるが、調査時に残存していた部分を確認すると、玄門部で102cm、奥壁部で94cmを計測する。東西の側壁は、泥岩の切石を持ち送り方式で積みあげて内傾するが、壁面を平坦にするために突出した部分を削った部分もあると思われる。また、羨道部の西側壁を中心に切り組みの技法も用いられている。天井石は不明であるが、掲載図書②によると破片が石室内に落ちこんでいたという。写真15~17によると周囲に石室破損部の石の破片がかなりが落ちている様子である。玄室・羨道の床は礫床で、河原石が一重から二重に敷かれているようである。

遺物 検出された遺物はきわめて少ないと言わざるをえないが、次の副葬品が第8図に見えるように、いずれも玄室内に散在していた。金属製品の法量は、第1表の通り。ここに示した金属製品の計測値は帝京大学山梨文化財研究所における保存処理後の計測データである。また、ガラス製小玉完形17点と破片少々（写真20）が出土しており、ガラス製小玉の計測値については報告書の計測表（第9図）を掲載する。

第1表 王塚古墳出土金属遺物計測表

遺物	長	幅	厚	重	写真
直刀	757	39	19	824.3	18
刀子	60	13	5	6.2	19
鉄鎌A	52	7	4	4.8	19
鉄鎌B	66	10	4	4.1	19
鉄鎌C	105	9	6	7.2	19
遺物	外長径	外短径	厚	重	写真
銅環A	30	27	5	13.2	19
銅環B	30	27	5	12.5	19

(mm · g)

〔掲載図書〕

- ①神奈川県民部県史編纂室（1979）『神奈川県史』20 考古資料
②旭区郷土史編集委員会（1980）『旭区郷土史』

[掲載図書概略]

①には、石室・羨道の基礎データと副葬品の内容が記され、この石室を「もっとも退化した末期形石室」であるとしている。②には、旭区の近隣地域に築造された稻荷前古墳群・朝光寺原古墳群・三保杉沢古墳・瀬戸ヶ谷古墳についての言及があった後に、①より詳細に石室・玄室の基礎データと副葬品の内容が記されている。そして、この被葬者を律令制的な「中央集権体制に組み込まれた、武藏国都筑郡か久良岐郡の大家族の戸主である有力な家父長か、その親族であったと考えられる」と指摘している。

なお、王塚古墳石室の図として玄室・奥壁・東側壁の実測図と報告書の写真6組も掲載している。

[小結]

王塚古墳は泥岩の切石積石室をもつという点では、南武藏の後期古墳の全体的傾向と一致をみる。しかし、袖なしの切石積石室となると類例は少なく、恩田川右岸の三保杉沢古墳があげられる程度である。この古墳は全長28mの前方後円墳で、埴輪の編年などから6世紀後半のものと考えられている。なお、同じく恩田川右岸に位置する北門古墳群は2・3号墳が泥岩の切石積石室であり、1号墳の周溝からは人物埴輪が出土している。古墳群は6世紀後半から7世紀前半の築造と言われている。

また、王塚古墳が切り組みの技法を用いていることも注目され、早瀬川右岸の赤田1号墳（円墳）や矢上川左岸の馬絹古墳（円墳）との関連を考える必要もある。年代は、前者が出土遺物などから7世紀はじめごろで、後者が墳丘の工法などから7世紀前半と考えられている。このような様相を勘案すると、王塚古墳の築造年代を掲載図書①②のように古墳時代の最末期や律令制の導入期（7世紀後半）ととらえるのではなく、6世紀後半ごろまでに遡る可能性があることを視野に入れておくべきであろう。いずれにしても、王塚古墳は帷子川左岸に位置する数少ない後期古墳のひとつで、下流域に築造された泥岩の切石積石室をもつ前方後円墳である軽井沢古墳（全長26.5m）とともに、南武藏の古墳時代を考える上で貴重な示唆を与えてくれる古墳である。

第9図 報告書掲載のガラス小玉計測表

Photo Ptn.	Carr. Ptn.	Color	○	○	□	Total		% D	
			→ D	→ A	→ C	T	T ₁		
1	C-1	Yellow Orange	4.0	1.4	2.6	1.5	1.4	2.9	65
2	B-1	Blue	4.0	1.3	2.1	1.1	1.0	2.1	50
3	A-2	"	3.6	1.3	2.5	1.4	1.4	2.8	69
4	A-2	"	4.1	1.6	2.6	-	-	-	51
5	D-1	"	3.9	-	2.3	1.95	1.95	3.9	85
6	B-2	Green Orange	2.8	0.9	1.8	1.0	1.3	2.3	64
7	E-1	"	4.2	1.5	2.5	1.2	1.0	2.5	60
8	C-2	"	3.5	1.0	1.8	1.0	1.0	2.0	57
9	D-2	Dark Blue	3.4	1.3	2.4	-	1.6	-	71
10	F-2	"	3.5	1.0	2.3	1.2	1.0	2.2	66
11	A-3	"	3.6	1.0	2.6	1.4	1.3	2.7	72
12	B-3	"	3.7	1.1	2.0	1.0	1.0	2.0	60
13	C-3	"	3.5	-	2.6	1.4	1.4	2.0	74
14	D-3	"	3.6	1.3	2.0	1.05	1.0	2.05	66
15	E-3	"	3.8	1.1	2.1	1.0	1.0	2.0	67
16	A-4	"	3.8	1.2	2.0	1.0	1.0	2.0	53
17	B-4	"	3.8	1.2	3.0	1.8	1.5	3.3	79



写真12 古墳全景



写真13 石室内部A (奥壁側から撮影)



写真14 石室内部B
(奥壁側より撮影)



写真16 東側壁外面と奥壁外面



写真15 奥壁外面



写真17 石室全景 (東側壁側より撮影)

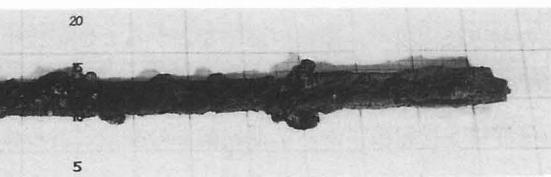
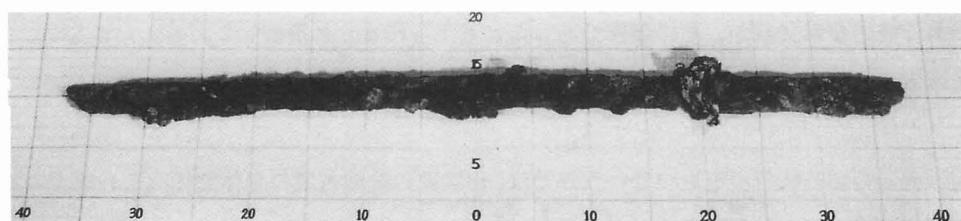


写真18 直刀

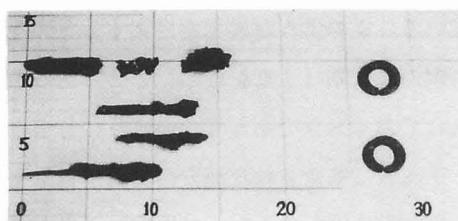


写真19 力子・鉄鎌・銅環

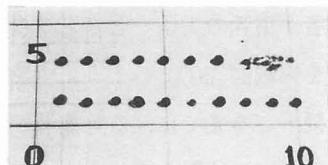


写真20 ガラス袋小玉